

令和 5 年度

---

---

小 論 文

---

---

10 : 30 ~ 12 : 10

教 養 学 部

地 域 社 会 学 科

一 般 選 抜 ( 中 期 日 程 )

注 意 事 項

1. 合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙は 2 枚あります。1 枚は下書きに、1 枚は清書に使いなさい。  
提出は清書の方の 1 枚だけです。
3. 合図があったら、解答用紙の指定欄に受験番号を記入しなさい。
4. 問題冊子は 1 ~ 5 ページまであります。落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
5. 解答は必ず解答用紙の指定欄に記入しなさい。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちに置いて下さい。
7. この冊子は、持ち帰ってさしつかえありません。

設問 以下の【課題文】を読んで、あとの問に答えなさい。なお、問で指定された字数はいずれも句読点を含む字数である。

### 【課題文】

突然ですが、みなさんは、ふだんどんなときに幸福を感じるでしょうか。おいしい食事やお酒をいただいているときや、好きな人と楽しい会話をしているときなど、人によって様々だとは思いますが、それでも幸福に共通するのは、そのような幸せな時間や日々が長く、ときにはいつまでも続いてほしいと感じることではないでしょうか。その意味で幸福は「持続」や「継続」と関連が強い点に特徴があります。

それに対し希望は、どちらかといえば「変化」と相性が良いようです。希望は「将来は〇〇をしたい」という場合など、今はそうではないが未来ではそれを実現させたいというように、希望には状態の変化を伴うのが一般的です。ドイツの哲学者であるブロッホは、希望を「まだない存在」と定義しましたが、ないものをある存在に変えていくのが、希望ともいえます。恋人が欲しい。あの料理を食べてみたい。もっと自分らしい仕事をしてみたい。希望はいつも未だ「ない」ものです。今は「ない」けれど、未来には「ある」ように変わってほしい。希望はつねに変化を求めるものです。

その上で希望学(注)では、希望を次のように考えました。希望とは「大切な何かを行動によって実現しようとする気持ち」だと。英語で希望は Hope is a Wish for Something to Come True by Action. としました。つまり希望は「気持ち(wish)」「何か(something)」「実現(come true)」「そして「行動(action)」という4本の柱から成り立つと考えたのです。そう考えると、希望が持てない人というのは、何らかの理由で、4本の柱のうち、いずれかが欠けていることになります。だからこそ、その欠けているものを満たすことで、希望を持てるようになるのではないかと。

このように幸福、そして希望を考えることは、住民で話し合いながら、どのような地域をつくっていくのか<sup>①</sup>を考える際に、一つのヒントを与えてくれます。地域づくりに関する話し合いなどで、住民の方に「この地域のどのようなところが好きですか」「何年先にもずっと維持されたまま、残したいものがありますか」とうかがうと、何がしかの答えが戻ってきます。すばらしい自然環境、保存されてきた伝統文化、人情に厚い土地柄など、いつまでも残っていてほしいと考えるものは、すぐに思い浮かびます。そして「そのなかで特に守り続けたいものは何ですか」とか、「守るためには何をすればよいでしょうか」といったところから、地域づくりの方向性が見えてきたりします。

ただ、続いて「では、この地域のなかで、変えていきたいことはありますか」とたずねると、会場に沈黙が広がるなど、すぐに答えが出てこないことも少なくありません。「もう今のままで十分です」「特にありません」といった返事が、特に長年地域に暮らす人たちから出てきたりします。そんなときは次のようにたずねてみます。「だとすれば、今何か困ったことがありますか」「不便なこととは何もありますか」というと、今度は少し反応が違ってきたりします。

どんなに素晴らしい地域でも、何も困っていないことがないといった楽園、ユートピアのようなところはありません。住民のみんなが困っていながらも、どうしようもないとあきらめて、日々暮ら

しているのが多くの実情でしょう。

だから「とにかく、今日は日頃困っていることを、まずは声に出してみましょう」と促すと「交通の便が悪くなった」とか、「買い物が難しくなった」など、少しずつ意見も出てきます。よく考えれば、誰でもが何らかの困ったことを抱えています。「困ったことを、どうやったら少しでも困らないように、みんなで変えていけるのか、考えてみませんか」。個人や家族だけではどうしようもないことでも、みんなで意見をまとめ、役所や役場に話してみる。そうすれば、困ったことを少しずつでも変えていけるかもしれない。そういうムードが定着すれば、地域は必ず動き出します。

いつまでも守り続けたい幸福のアプローチと、少しでも変えていきたい希望のアプローチ。これら2つのアプローチを、車の両輪のようにうまく動かしていくことが、住民主体の地域活動には求められていると思います。

甚大な被害をもたらした東日本大震災後、復興の過程のなかで「絆」の大切さがしばしば指摘されてきました。絆が意味する人と人とのつながりやそれに基づく協力が、困難を乗り越える大きな力となってきました。震災からの復興に限らず、人口減少が続く日本の地域社会において、絆による連携はますます求められているように思います。

社会学の研究においては、絆には少なくとも2種類が存在するという主張があります。絆は英語では、bonds といったり、ties といった言葉などで訳されることも多いですが、このうちの ties を用いて、strong ties(ストロングタイズ：強い絆)と weak ties(ウィークタイズ：緩やかな絆)に分類されています。この分類を提案したのは、マーク・グラノヴェッターさんという米国の有名な社会学者です。

この2つの絆のうち、ストロングタイズは、文字通り強い結束によってつながった信頼関係を意味します。例としては、同じ地域に生まれ育ってきた幼なじみの親友だったり、ほぼ毎日会ったりするような友人だったり、古くからの職場の仲間や同僚の他、生活を共にする家族なども、ストロングタイズといえるでしょう。

ストロングタイズの特徴をひとことでいえば「近い」ことであって、きわめて密接な接触や交流が日常的に繰り返されることにあります。そのためお互いのことをよく理解していて、情報の多くを共有しているものです。悩みごとや心配ごとがどちらかにあったときには、もう一方は素早く察知するような「あうん」の呼吸もあったりします。言葉は不要で、いっしょにいてだけで、安心を感じるような間柄でもあります。そんなストロングタイズの関係が持続できれば、強い幸福感にもつながります。

地縁、血縁などという言葉にも通じるストロングタイズは、伝統的に日本の地域社会において、重視されてきたものです。ストロングタイズによる地域の結束を守ってきた住民は、信頼できる友人や家族と生活を続けられることに強い幸福感を抱いていることも多いように思います。幸福な地域を守り続けられるかどうかには、このストロングタイズの持続がポイントになるでしょう。

それに対しウィークタイズは、ストロングタイズのような近さはありません。むしろどちらかといえば「遠い」関係にあることこそが特徴です。毎日会うというよりは、たまに会う程度の関係だっ

たりします。住んでいる地域も違えば、就いている職業も違う。これまで経験してきたことも異なっているので、会って話をすると、お互いの話を「？」と感じ、「なんのことなのか、よくわからない」と思うこともあったりします。その意味でウィークタイズは、弱いつながりの関係なのです。

しかしながらウィークタイズには、弱い関係であると同時に、タイズという信頼でつながった関係でもあります。不明な点があったとしても、それでも会えばお互いにリスペクト(敬意)を持って接し、それぞれの話に素直に耳を傾けることができたりします。関係が希薄な分だけ、直接の利害関係も少なく、損得勘定や嘘や打算など一切なく、たまに会うのが楽しいと純粋に思えるのがウィークタイズの特徴です。

このような自分の日常とは違う世界に生きているウィークタイズの友人からもたらされる情報は、ときに思いがけず新鮮さをもって受け止められたりします。突然「？」から「！」になる瞬間が、ときに起こるのです。そこでは「そうか、こういうことをやってみればいいのか！」「自分もやってみよう！」といった「気づき」を与えてくれたりします。実際、信頼のできる別世界の友人から気づきを得ることで、これまでなかった発想や活動が生まれるきっかけになったりします。その結果として「やってみよう」「やってみよう」という希望も生じていきます。ストロングタイズが安心や幸福の源泉だとすれば、ウィークタイズは気づきや希望の原動力になるのです。

東日本大震災からしばらくして、釜石のある経営者から「このような経験をして、ウィークタイズが大切であることを身に染みて感じた」と言われたことがあります。復旧や復興の過程においては、地元住民同士の協力や地域の同業他社との一致団結が求められることはいうまでもありません。ただそれに加えて、自分たちの頑張りに対して、違う地域で活動している、たまに会う程度だった人々や企業からの、励ましやサポートの申し出が、どれだけ力を与えてくれたかを、その経営者は熱く語ってくれました。

人口減少に危機を感じている地域でも、様々なプロジェクトが企画され、実行されたりします。そのようなプロジェクトを遂行していくには、多様で多彩な顔触れが求められることは多く、地域の人々だけで完結させようとすれば、どうしても齟齬が生じてしまったりします。そんなときには、ウィークタイズの関係にある外部の人々に率直に協力を求め、地域を超えたネットワークの力を活かしてプロジェクトを進めていくことがカギになります。

これからは伝統的なストロングタイズの関係を守りつつ、ウィークタイズのネットワークを広げ②ていく努力が、希望の持てる地域社会づくりには欠かせません。

ウィークタイズが表現する緩やかな信頼関係は、多くが異なる地域に生きる人々の間に創られるものですが、同時に地域内でも欠かせないものです。

三陸地方には「津波てんでんこ」という言葉があります。てんでんこの「てんでん」は「手に手に」から変化したもので「めいめいで」を意味しています。東日本大震災で被害を受けた岩手県釜石市が策定した釜石復興まちづくり基本計画には、津波てんでんこについて「津波のときには、自分の命は自分で守るという意識で家族がばらばらになっても逃げることを優先する教え」と書かれています。

震災当時、釜石市役所の防災課長だった佐々木守さんは震災後、全国で防災に関する講演を依頼されることが多々あります。そこで佐々木さんは、震災で多くの地域からいただいた支援への感謝に加え、多くの命を守ることができなかった自責と悔いを話してこられました。佐々木さんは「津波が来たら、とにかく逃げる。それしかないんです」とおっしゃいます。

津波てんでんこの話を聞けば、津波の際には他人を顧みず、自分を最優先して逃げることで、多くの方は理解されます。しかしそれは同時に、過去の津波経験は「てんでんこ」ということが実際にはいかに困難であるかを物語ってもいます。

東日本大震災の直後、午後3時頃に津波警報が鳴りました。それぞれ仕事に出ていた夫婦は、すぐに電話で連絡を取り合います。夫は、海沿いの家に住んでいる足が悪い親が心配になり、助けに向かいます。一方で妻は、学校にまだいるはずの子どものもとに向かいます。夫婦は実家と学校に車を急がせます。すぐに海沿いも学校周辺も迎えを急ぐ車で大渋滞となり、動けません。そこに大津波が押し寄せ、すべてをのみ込んでいきました。

自分を最優先するてんでんこなんて簡単にはできないのです。緊急時には誰もが何をさておき家族のことを心配します。自分を最優先など、考えられない、簡単でないからこそ、三陸の地では「津波てんでんこ」という言葉に痛切な祈りを込めてきたのです。

だとすれば、どうすれば、家族のことを案じながらも、誰もが自分の命をまず守るという決心や行動ができるのでしょうか。そのキーワードが地域のなかでの「信頼づくり」です。

保護者と学校関係者は、地震や津波が来たときの避難や防災について、定期的に話し合っておくことが求められます。危険が迫ったときには、お互いがどうすればよいか、とことん確認しておくのです。子どもも親に「迎えに来ないで。来たら危ない」と伝えます。親は「学校の先生を信頼して大丈夫。まずは自分の命を守るんだ。迎えにいつ津波に巻き込まれたら、何より子どもが悲しむ」と決意します。そんな信頼づくりがない限り、かけがえのない命は守れません。

同じことは住まいのある地域にも及びます。近所のどこに足の悪い年寄りがいるか、住民の誰もがわかっているようにします。何かのときには、誰がその年寄りを連れて逃げるかも決めてあります。「助け合って逃げる体制が町内会にはある。町内の仲間を信頼しよう。だから今は自分の命を守るんだ」。そんな信頼関係を共有する地域であれば、被害を最小限に食い止められたりするので

③ 誰もが自分の命を守り、地域の希望をつなぐには、日頃からの緩やかな信頼関係をつくる地道な取り組みが欠かせません。人口が減少する地域でも、すべての住民がお互いをよく知っているわけではないでしょう。次の大きな地震や津波が襲う前に、日本中の地域に信頼の輪を広げていくことが求められるのです。

(出典 玄田有史「希望 人口減少と労働問題」白波瀬佐和子編『東大塾 これからの日本の人口と社会』東京大学出版会、2019年より。出題にあたって、原文の一部を改変した。)

(注) 玄田有史(東京大学社会科学研究所教授)らが参画する、2005年、東京大学社会科学研究所に全所的プロジェクトとして設置された学問分野。経済学、社会学、政治学、歴史学などを総合し、社会における希望の意味、希望が社会に育まれる条件などを考える。岩手県釜石市におけるオーラル・ヒストリー(口述史)の手法を用いた「震災の記憶」を記録するプロジェクト、福井県福井市における市内高校卒業後の地域移動調査といったプロジェクトを実施している。

問 1 下線部①で筆者は、「幸福、そして希望を考えることは、住民で話し合いながら、どのような地域をつくっていくのかを考える際に、一つのヒントを与えてくれます」と述べているが、筆者がそう述べるのはなぜか。課題文の記述を踏まえて説明しなさい。(100字以内)

問 2 下線部②で筆者は、「これからは伝統的なストロングタイズの関係を守りつつ、ウィークタイズのネットワークを広げていく努力が、希望の持てる地域社会づくりには欠かせません」と述べているが、筆者がそう考えるのはなぜか。「ストロングタイズ」及び「ウィークタイズ」の語を用いて、課題文の記述を踏まえて説明しなさい。(100字以内)

問 3 下線部③で筆者は、「誰もが自分の命を守り、地域の希望をつなぐには、日頃からの緩やかな信頼関係をつくる地道な取り組みが欠かせません」と述べているが、筆者がそう考える理由を説明しなさい。その上で、なぜ地域に緩やかな信頼関係をつくる取り組みが求められるのか、あなた自身のこれまでの見聞を踏まえ考えられる社会的な背景を3点挙げなさい。(600字以内)